

群馬県認知症ケア専門士会活動報告

はじめに、私達群馬県認知症ケア専門士会は事務局を前橋に置き拠点として活動しています。

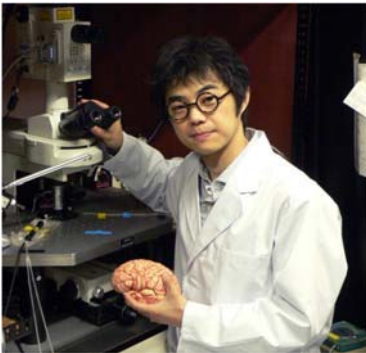
群馬県では、認知症ケアを志す認知症ケア専門士の有志が集まり、2006年より任意団体を立ち上げ認知症ケアの向上を目的として活動してきました。その団体は2009年にNPO法人「群馬県認知症ケア研究研修連絡協議会」となり、その後、色々な経過をたどり市民後見人養成事業等や他の分野の活動にも発展しています。また、現在の「群馬県認知症ケア専門士会」は2011年、日本認知症学会の承認を受けて誕生致しました。

活動内容としてはケア専門士が認知症のその人を理解し、よりその人に合ったケアを現場で、実践的にリーダー的立場で発揮できるよう継続的な事例検討会、日曜会幅広い知識を得るための講演会を主にしています。また、中々単位修得が難しいという会員の声に基づき合わせて学会の単位修得の支援も積極的におこなっています。

その他、会員の方とのメールの充実も図り会から毎月現場の認知症やケアに関するコラムを毎月、理事が交代で配信して連携を図っております。ケア専門士・介護福祉士受験対策講座等を行い、資格取得の支援を行っています。



《講演会》 26年10月19日 群馬県立県民健康科学大学大講堂 参加人数 380名



<1部> 講演：脳の仕事、記憶のメカニズム、薬について

講師：池谷 裕二 先生 薬学博士、東京大学・大学院薬学系研究科・教授。神経科学および薬理学を専門とし、海馬や大脳皮質の可塑性を研究。脳科学の知見を平易な言葉で解説する一般向けの著作「進化しすぎた脳」「単純な脳、複雑な私」「脳はこんなに悩ましい」「自分では気づかない、ココロの盲点」などを執筆



<2部> 困難事例検討会報告

- 事例1 前橋福祉センター：高橋将弘 玄関で裸になるなど人が困る行為を行うAさんの真意は？
- 事例2 グループホームアリス：扇田孝行 突然怒ったり、泣いたり。その人中心のケアとは？
- 事例3 サンシャインわたらせ：淡路英子 穏やかだったAさんが食事拒否や「殺してやる!」と変化した理由は？

《介護支援専門員研修の専門課程IIグループホーム研修支援》

現状はまだ、職員中心のケアです。その人中心のケアに視点を変換するため、認知症の人のアセスメント過程をグループワークで行っているところです。

《定例役員会》役員会は月1回行っています。全員が集まることは難しいのですが参加出来るメンバーでおこなっています。1月に1年間の事業計画や担当者などを決めそれを基に年間の事業を実施しています。役員は群馬県の各地域から参加しますので遠い人では1時間30分位かけての参加になります。



《日曜会》

今年度から開始しました。

お菓子をつまみながら、ケア専門士会のメンバーで時々テーマで行っています。

改定介護保険について学んだり、専門士が社会の中で果たせる役割は何かを話し合ったり、ビデオを活用して認知症の人の体験から、ケアの関わりを学んだりしています。



《毎月のコラム》会員のみなさま 冬のきびしい寒さも少しずつ和らいで、庭先の福寿草が満開になり白梅が咲いています。3月のコラムをお送りします。今月は会長の福島からです。

『去る3月2日東京で行われた、日本臨床倫理学会に行ってきました。メインスピーチをされた、ステーブン・G・ポスト教授（予防医学：アメリカ医療人文科学センター長）のメッセージを皆様にお伝えします。ポスト先生は「アルツハイマー病における倫理的課題」という書籍で、「21世紀の最高医学書の一冊」に選ばれています。その書籍をベースに講演をされたのですが、①認知症の人のアイデンティティー（人柄）はもちろん継続しているのだ。そのアイデンティティーを保障することがケアなのだ。②そのためには私たち自身が希望持つこと（困難は乗り越える・何度でも何度でもそのことを実行する・その結果希望とは人間にとって意義深いものとなるのだ）③そして人間にとって大切なものは無条件の愛・利他的行動・開拓者としての研究が大切なのだ。日本のケアはそこを目指している素晴らしいものであり、一層の発展を願っているということでした。』（文担当：福島富和）

日常に埋没しがちな私達ですがしっかりと、ケアの原点に立ち返りながら皆さまと一緒に頑張っていきたいです。